博士論文要旨

A Cognitive Grammar Approach to *to*-Infinitive Constructions

to 不定詞構文に関する認知文法的考察

熊本県立大学大学院文学研究科
英語英米文学専攻博士後期課程　佐々木昌太郎

英語の to 不定詞については、これまで Wood (1956), Dixon (1984), Quirk et al. (1985), Wierzbicka (1988), Dirven (1989), Langacker (1991, 2008, 2009, 2015), Verspoor (1996, 1999), Duffley (1992, 2000, 2003, 2006, 2020), Smith and Escobedo (2001), Hamada (2002), Huddleston and Pullum (2002), Egan (2008), Smith (2009) をはじめとした多くの先行研究が存在する。これらの to 不定詞研究においては、多様な用法における to 不定詞の使用の動機づけを明らかにすることや、同じく英語の非定形節とされる-ing との違いを明らかにすることが中心的に行われてきた。具体的には、これらの先行研究においては、to 不定詞は典型的に未来性、もしくは潜在性によって使用がもたらされるという点で概ね一致した見解が述べられている。それに対して、-ing については、主節と補文の出来事の間の時間的重なり、つまり同時性によって典型的に使用がもたらされると述べられている。

しかしながら、これまでの to 不定詞構文の研究においては少なくとも次の 4 つの課題が残されていると言える。1 点目は、to 不定詞構文の事例の分類に関する問題である。to 不定詞構文と-ing 構文の多様な事例の分類を試みている先行研究として代表的なものは Smith and Escobedo (2001) や Smith (2009) が挙げられ、これらの研究においては to 不定詞構文と-ing 構文の事例は共に大きく 4 つのグループに分類されると述べられている。しかし、Smith and Escobedo や Smith においては「何が要因となり両構文の事例を大きく 4 つに分類することをもたらしているのか」という点については明らかにされていない。

2 点目についても to 不定詞構文の分類に関わるが、ここでの問題は、同じく非定形節として分類される-ing との言語使用場面における関係性、つまり分布（使用範囲）に関わる。to 不定詞構文と-ing 構文を同時に扱い、分類を試みている研究としては Smith and Escobedo (2001) や Smith (2009) が挙げられる。しかし、Smith and Escobedo や Smith の分類は、to 不定詞構文と-ing 構文のそれぞれのカテゴリー内における分類の提示が行われているだけであり、実際の言語使用例の一連のサイクルにおける両構文の分布の違いを反映したものとはなっていない。

3 点目について、これまでの to 不定詞研究において中心的な問題となっていたのは主節述語に後続する to 不定詞の用法であり、to 不定詞の主語用法については十分な研究が行わ

れてきたとは言えない。Egan (2008) や Duffley (2003) などによって to 不定詞主語の事例に対する分析は行われているものの、これらの研究においては、なぜ-ing と比べ、to 不定詞は主語として用いられることが稀であるのかという点については明らかにされていない。

4 点目は迂言的使役構文と知覚構文における (to) 不定詞の用法に関する問題である。両構文は能動態では (1a, c) のように原形不定詞（to なし不定詞）を補文としてとるが、(1b, d) のように受動化されると to 不定詞が用いられる。

(1) a. Mary made John drive the car.
b. John was made to drive the car.
c. They saw/heard/noticed John kick Mary.
d. John was seen/heard/noticed to kick Mary. (Dixon 2005: 251–252)

葛西 (2004) や Dixon (2005) などは (1a, c) が (1b, d) のように受動化されることによって、直接性・同時性が失われ、間接性・非同時性（時間的なずれ）が含意され、そのことが (1b, d) のような受動態において to 不定詞の使用をもたらしていると述べている。しかし、これらの先行研究においては、なぜ受動文 (1b, d) においては直接性・同時性が失われ、間接性・非同時性が含意されるのかという点については明らかにされていない。

本論文は認知文法のコントロールサイクル (Langacker 2002, 2009) に基づき to 不定詞構文に対して一貫した分析を行うことで、先行研究では明らかにされていない上記の 4 つの課題を考察する。Langacker (2002, 2009) はコントロールサイクルを主に that 節などの定形節を補文としてとる主節述語の分析に適用している。例えば、(2) における主節述語である suspect、decide、know はそれぞれ認識的コントロールサイクル[1]の Potential Phase、Action Phase、Result Phase を表していると述べている。

(2) She suspected/decided/knew that her husband was unfaithful. (Langacker 2009: 152)

Langacker はコントロールサイクルは定形節を補文としてとる述語のみに限定されるものとして考えているわけではなく、(3a, b) のように to 不定詞を取る主節述語は実効的コントロールに関わると述べている。具体的には、(3a) と (3b) における主節述語はそれぞれ何かを引き起こそうとすることに対する望みや影響に関することを表していると述べている。

[1] Langacker (2009) によれば、認識的コントロールサイクルとはある知識を取り込もうとする我々の努力に関わるものである。また、この後の議論で触れることになる実効的コントロールサイクルとは、何かを引き起こそうとする我々の働きかけに関わるものである。

(3) a. She wants/hopes/aspires to become an opera diva.

b. She ordered/forced/persuaded her daughter to end the relationship. (Langacker 2009: 153)

しかし、Langacker のコントロールサイクルに基づいた分析は定形節を補文としてとる主節述語に焦点が当てられており、非定形節である to 不定詞を補文としてとる主節述語に対してはこれ以上のことは述べられていない。本論文では Langacker のコントロールサイクルを to 不定詞構文の分析に適用することで、これまでの to 不定詞研究では明らかにされてこなかった 4 つの課題を考察する。

本論文は 8 つの章から構成されている。第 1 章では、本論文の目的について述べ、論文の全体像を明らかにする。

第 2 章では、認知文法の理論的枠組みを概観し、コントロールサイクルをはじめとした本論文に関連する基本的な概念の説明を行う。

第 3 章では、コントロールサイクルを主節述語に後続する to 不定詞の用例の分析に適用し、各用例の分類の基盤となる認知的な要因を明らかにする。具体的には、to 不定詞構文の各用例は主節述語がコントロールサイクル上の Potential Phase、Action Phase、Result Phase のどの段階を表すかによって、大きく 3 つに分類されることを主張する。このようなコントロールサイクルに基づいた分類に加えて、第 3 章ではコーパス (*Corpus of Contemporary American English*, COCA) を使用した実証的な分析を行い、to 不定詞構文は Potential Phase を表す主節述語が伴う事例の使用頻度が高く、Action Phase を表すものも相対的に使用頻度が高いと言えることを示す。

第 4 章においては、to 不定詞の特徴をさらに明らかにするため、コントロールサイクルに基づき、主節述語に後続する to 不定詞と-ing を比較する。本章においては、COCA から採取した to 不定詞構文と-ing 構文の事例を分析することで、to 不定詞構文については多くの事例の主節述語が Potential Phase を表すのに対して、-ing 構文の多くの事例は Action Phase を表すことを明らかにする。また、to 不定詞構文については Action`Phase を表す事例も多く存在することを示すが、to 不定詞構文と-ing 構文の主節述語が典型的に表す Action Phase の局面はそれぞれ範囲が異なることを指摘する。具体的には、to 不定詞構文の場合には、Potential Phase に近い Action Phase の局面 (Initial Action Stage) を典型的に表すのに対して、-ing 構文の場合には、Result Phase に近い Action Phase の局面 (Execution Stage) を典型的に表すということを主張する。

第 5 章ではコントロールサイクルを to 不定詞の主語用法に適用する。本章では、COCA から採取した to 不定詞の主語用法を分析し、そのほとんどの事例が Result Phase と対応する事例であるということを明らかにする。このように Result Phase と対応する事例については、to 不定詞主語には明確な方向性の意味が喚起されず、文主語としての自律性 (cf. Langacker 1987: 236) が保たれ、Potential Phase や Action Phase と対応する事例よりも使用頻

度が高いと説明される。また、第 5 章においては、to 不定詞主語と比べ、-ing 主語の方が使用頻度が高いことが指摘され、その理由についても説明される。具体的には、to 不定詞と比較し、-ing は名詞らしさを兼ね備えているという先行研究の指摘を確認したうえで、to 不定詞が概念的に依存的であるのに対して、-ing が自律的であるという点を確認する。そして、文主語の自律性の観点から、to 不定詞よりも-ing の方が主語としてふさわしく、使用頻度が高いという説明がなされる。

第 6 章と第 7 章では、コントロールサイクルに基づき、迂言的使役構文と知覚構文に関する考察がなされる。第 6 章では迂言的使役構文の各用例における使役述語がコントロールサイクルのどの段階を表しているのかを明らかにし、(1b) のような迂言的使役構文の受動態の用例は Result Phase と対応することを主張する。このような主張に基づき、(1b) のような受動態の用例では認知主体側の参照点アクセスが顕在化し、そこに伴う主体的な方向性によって to 不定詞の使用がもたらされることを主張する。

第 7 章では、第 6 章において展開された考察が知覚構文にも当てはまることを明らかにする。具体的には、知覚構文の各用例がコントロールサイクル上のどの段階と対応するのかを考察した上で、(1d) のような受動態の用例は Result Phase と対応することを主張する。また、迂言的使役構文の場合と同様に、知覚構文受動態の用例においても認知主体側の参照点アクセスに伴う方向性が関与し、このような主体的方向性によって to 不定詞の使用がもたらされることを主張する。

本論文における最後の章である第 8 章では、本論文のまとめと今後の研究課題について述べられている。